The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	全てのヲは格助詞か
Author(s)	中尾, 有岐
Citation	大阪大学世界言語研究センター論集. 2012, 7, p. 75-88
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/4156
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

全てのヲは格助詞か

中　尾　有　岐*
NAKAO Yuki

Abstract:

Does the Particle "Wo" Always Indicate Case Relation?

Although the forming conditions of the usage of "*wo* for circumstances", e.g. in the sentence "Ame no naka wo hashiru" (run in the rain) were often explained with the terms of "Mobility" and "Adversity" so far , in the forming of "*wo* for circumstances" exist cases of usage where "Mobility" and "Adversity" cannot be detected, e.g. in the sentence "*Atatakai hidamari no naka wo neko ga kimochiyosaso ni nemutte iru*" (The cat is sleeping pleasantly in a warm sunny spot). What is necessary for the formation of "*wo* for circumstances" is not "Mobility" or "Adversity" but meaning the "Relevance Condition". "Relevance Condition" shows that the circumstantial complement and the events in the whole sentence are in strong relativity relations. Further, I re-examined the "*Path*" usage in "*wo* for motion", and I classified it into two types: "bound path", e.g. in the sentence "*Hashi wo wataru*" (cross a bridge) and "boundless path", e.g. in the sentence "*Kouen wo aruku*"(walk in the park). Thus "*wo* for object", "*wo* for motion" and "*wo* for circumstances" are not continuous relations. I suggest that "bound path" is a case of usage of "*wo* for object", and "boundless path" is a case of usage of "*wo* for circumstances", the former being a case particle but latter an element of circumstances.

Keywords : *wo* for circumstances, movement, adversity, relevance condition, bound path, boundless path
キーワード： 状況のヲ，移動性，逆境性，関連性条件，有境界性経路，無境界性経路

1. はじめに

ヲは基本的に，「水を飲む」「息子を心配する」のような動詞の動作や感情のおよぶ対象（以下，このようなヲを「対象のヲ」，そのヲを伴う部分を「対象補語」と呼ぶ）を表すが，ヲの用法の中には「対象を表す」とは言いにくい用法が存在する。その一つが，「公園を走

＊　国際交流基金クアラルンプール日本文化センター・日本語専門家

る」のような移動の経路を表すといわれる用法である（当面[1]，このようなヲを「移動のヲ」，そのヲを伴う部分を杉本（1993）にならい「移動補語」と呼ぶ）。また，「雨の中を走る」のような動作が行われる状況を表す用法もある（以下，このようなヲを「状況のヲ」，そのヲを伴う部分を「状況補語」と呼ぶ）。これらのヲの関係について，杉本（1993）では，「状況の『を』を移動格の『を』と区別して考える必要がなく，状況の『を』は移動格の『を』の一種である」と述べ，「状況のヲ」を含めたこれらのヲを全て格助詞に位置付けている。加藤（2006）では，「状況補語の用法は，動詞句の項になるような名詞句ではなく，背景的状況を付加的に述べるもの」だと述べており，「状況のヲ」を格助詞とみなしてはいないものの，ヲは「機能分担が明確でなく，それぞれの用法が連続的な関係にある」と考えている。天野（2007）でも，「移動のヲ」と「状況のヲ」の典型どうしは異なる特徴を持つとしているが，「移動のヲ」と「状況のヲ」は連続しているものと捉えている。宇都宮（1998）では，文法格であるのは「対象のヲ」のみとし，「移動のヲ」と「状況のヲ」は副詞格に位置付けている。

以上のように，「対象のヲ」「移動のヲ」「状況のヲ」の位置づけは先行研究によって異なるが，それぞれを連続したものとみなしている点は共通する。「状況のヲ」が「移動のヲ」や「対象のヲ」と連続するものとする根拠として，杉本（1993）では「移動性」が，天野（2007）では臨時的他動詞句に結び付く「逆境性[2]」が「状況のヲ」に付与されていることをあげている。それでは，次の例はどうだろうか。

(1) しとしとと雨が降る中を，色とりどりのあじさいが咲いている。

(2) 暖かい陽だまりの中を，猫が気持ちよさそうに眠っている。

（1）（2）のヲは「状況のヲ」だと言えるが，この文に「移動性」や「逆境性」を読み込むことは難しい。つまり，「状況のヲ」成立の必須条件は，「移動性」や「逆境性」ではないということになる。また，「移動性」や「逆境性」が「状況のヲ」成立の必須条件でないとすれば，「対象のヲ」，「移動のヲ」と「状況のヲ」が連続した関係にあるという点についても再考する必要があろう。

そこで，本稿では「状況のヲ」における「移動性」「逆境性」について再検討した上で，新たな「状況のヲ」の成立条件を提示する。その上で，改めて「状況のヲ」と「移動のヲ」，「対象のヲ」との関係を考察する。

2. 「状況のヲ」における「移動性」と「逆境性」

杉本（1993）は，「状況のヲ」を「移動との結びつきが弱くなった移動格」と位置付け，主文の述語動詞に「純粋な移動動詞」が用いられた場合は「移動の対象となる場所（経路，

1 「当面」という用語を用いたのは，議論が進行していくに従って最終的にはこの用語を破棄し，「公園を走る」のような例を「移動のヲ」ではなく，「状況のヲ」と位置付けるためである。詳細は 4，5 節で述べる。

2 本稿では，天野（2007）のいう「出来事・動作の実現を阻む抵抗物に対抗し，それを打ち破って遂行する動作性」を意味する「逆境の意味合い」と「対抗動作性」を合わせて，「逆境性」と呼ぶこととする。

起点，経由点)」を表し，それ以外の「何らかの移動性を持った動詞」の場合は「その動作が行われる場所（状況)」を表すと述べ，主文の述語動詞の性質の違いによってヲを含む文が「移動」か「状況」かに分けることができると捉えている。この定義にそって考えれば，杉本（1993）のいう純粋な移動動詞である「歩く」という動詞が用いられた場合は「移動のヲ」と捉えられ，またヲに伴う部分は「移動補語」ということになる。しかし，(3）のように「歩く」を述語としている二重ヲ格文において，ヲ格補語がどちらとも「移動のヲ」であると解釈することは難しい。

(3) 桜吹雪の中を道を歩いた。　（杉本 1993(24b)下線は筆者）

杉本（1993）においても，(3）の例については「桜吹雪の中」は「状況補語」,「道」は「移動補語」であると述べられており，説明に混乱が生じている。それに対して天野（2007）では，「状況のヲ」の文法的特徴の一つとして，(4）(5）のように「移動性」の感じられない動詞であっても「状況のヲ」の述語動詞となりえることを示し，結びつきえる述語の種類が比較的自由であることを示している。

(4) 防衛軍は（が)，豪雨の中を最後まで戦った。　（天野 2007(3)）

(5) 電力会社の社員は（が)，吹雪の中を点検作業した。　（天野 2007(4)）

このことからも,「移動性」が「状況のヲ」成立の必須条件ではないことがわかる。ただ，天野（2007）は「状況のヲ」と「移動のヲ」は連続するものという立場に立っており,「移動性」が「状況のヲ」の成立に無関係だと考えているわけではない。有意志者が主語の場合は「逆境性」のみでも成立するが，無意志物主語の場合は「移動性」と「逆境性」の両方の要素がなければ「状況のヲ」として成立しないと述べている。天野（2007）における「状況のヲ」の成立条件を表で示すと以下のようになる。

表 1

	主文の主語の意志性	移動性	逆境性	成立
状況のヲ	有意志者	○	○	○
		×	○	○
	無意志物	○	○	○
		×	○	×

まず，有意志者主語の場合について検討したい。

(6) 社長退陣の怒号が響く中を，社長は練習通りに演説した。　（天野 2007(23)）

(7) *[3]桜の花が舞い散る中を，社長は練習通りに演説した。　（天野 2007(22)）

天野（2007）では，(6）は動作の実現を阻む「社長退陣の怒号が響く中」という状況に対抗し，それを打ち破って「演説する」という行為を遂行したと解釈でき「逆境性」が読み込めるが，(7）の「桜の花が舞い散る中」という状況は動作の実現を阻む抵抗物という

3　(7) の許容度判定は天野（2007）の引用によるものであり，筆者が全面的にそれに従っているというわけではない。

より，むしろ動作の実現を後押しするような状況であるため，文全体に「逆境性」を読み込むことができず，「状況のヲ」として成立していないと説明している。しかし，（6）と同じ「桜の花が舞い散る中」という動作の実現を後押しするような状況であっても，次の（8）は，非文とならない。

(8) 桜の花が舞い散る中を，社長は晴れやかな笑顔で演説した。

天野（2007）では，動作の実現を支援するような状況が状況補語となった文の動詞は，「いずれも狭義の移動動詞であり，そうでなければ成り立たない」と述べているが，「演説する」を狭義の移動動詞と捉えることは難しく，（8）が成立するのは述語動詞が「狭義の移動動詞」であるためではないと言えよう。

次に，無意志物主語について検討する。天野（2007）では，無意志物が主語になった場合は，「逆境性」があっても「移動性」がなければ成立しないとしている。

(9) 静かな森の中を，鹿の角突きの音だけが響いた。　（天野 2007(30)）

(10) 二次災害が心配される中を，台風が通過した。　（天野 2007(31)）

天野（2007）によると，（9）の「響く」は「音」が空間を移動して「響き渡る」という意味で，（10）の「通過する」は「台風」自身が進路をとり，ある場所を通るという意味で「移動性」があるとする。ここで読み手が「逆境性」を読み込まなければ「移動性」のみであるから，これらの文は「移動のヲ」となるという。そして，「逆境性」を読み込む場合，これらの文における「逆境性」とは，（9）においては〈鹿が角を突く音が，静寂を破って響き渡る〉ということから，「静寂（音のない状況）」が「角突きという出来事」に対抗する状況と解釈され，また（10）においては「二次災害が心配される中」が「通過する動き」に対抗する状況であるとする。確かに（9）（10）においては，「移動性」と「逆境性」をそのように読みとることができないこともないが，それでは，次の（11）の例はどうだろうか。

(11) しとしとと降る雨の中を，かすかに匂つてゐる菜種のやうで，げにやさしくも濃やかな情緒がそこにある。　（萩原朔太郎「婦人と雨」 http://www.aozora.gr.jp/cards/000067/files/1790.html 下線は筆者）

（11）においては，「菜種」，つまり無意志物が主語となっており，そして述語動詞には「匂っている」という「移動性」のない動詞が用いられているにもかかわらず，「状況のヲ」として成立している。植物を有意志物と捉える可能性も全面的に否定はできないが[4]，その場合でも，「状況のヲ」の成立に必要だとされる「逆境性」は，「しとしとと降る雨の中を」と「かすかに匂っている」の間に読み込むことは難しい。このことから，「状況のヲ」の成立にあたり「移動性」と「逆境性」は必ずしも必要ではないことがわかる。

「移動のヲ」との関係について，天野（2007）では，「移動性」があっても「逆境性」がなければ「移動動詞」と捉えているため，加藤（2006）が「状況のヲ」としてあげている次の例は，天野（2007）では「移動のヲ」として扱われている。

4　有意志物扱いになり得る可能性があることは，査読者からご教示いただいた。

(12) 東京行きの始発便は，そよ風の中を気持ちよさそうに新千歳空港を飛び立った。
（加藤 2006(31)）

天野（2007）では，「状況のヲ」は移動性を持つ文から生まれたものと考えており，「移動性」を表すヲ句が「移動のヲ」か「状況のヲ」になるかは解釈次第としている。しかし，その拡張の結果生まれた「移動性」を持たない「状況のヲ」については，「文脈・状況により意味補充を行って，動詞句に臨時的他動詞としての意味合いを創造的に解釈」しようとしているから成り立つと説明し，「対象のヲ」に近いことを示している。「状況のヲ」が，移動性が強まれば「移動のヲ」に近づき，移動性が弱まれば「対象のヲ」に近づくものだとするならば，「移動のヲ」と「対象のヲ」は「状況のヲ」を挟んで両極に位置しているということなのだろうか。これら三類の位置づけも整理しなおす必要があると思われる。まずは，次節にて「状況のヲ」の成立条件を検討する。

3.　「状況のヲ」の成立条件

前節で「移動性」や「逆境性」が「状況のヲ」の成立における必須条件ではないと述べたが，それでは「状況のヲ」成立のための必須条件とは何なのであろうか。先ほどの例を見られたい。

(13) 社長退陣の怒号が響く中を，社長は練習通りに演説した。　（＝６）
(14) *桜の花が舞い散る中を，社長は練習通りに演説した。　（＝７）
(15) 桜の花が舞い散る中を，社長は晴れやかな笑顔で演説した。　（＝８）

（15）のような「逆境性」が感じられない文でも「状況のヲ」として成立することは前述したとおりであるが，それでは自然な文となる（13）（15）とそれに比べ許容度の低い（14）にはどのような違いがあるのだろうか。ここで，（13）（14）の主文である「社長は練習通りに演説した」という描写が自然に響く状況を思い浮かべていただきたい。わざわざ「練習通りに」と記されているので，想定しやすい状況は練習通りに演説がしにくい状況ではないだろうか。それは例えば（13）の「社長退陣の怒号が響く中」である。「社長退陣の怒号が響く中」という状況はまさに練習通りに演説しにくい状況で，それにも負けずに「練習通りに演説」をやり抜いたという社長の姿が目に浮かぶ。他にも次のような状況が考えられる。

(16) みんなが心配して見守る中を，社長は練習通りに演説した。

（16）の解釈は，社長が頼りない人であれば，社外の人に向けてその会社の方針を社長がしっかり説明してくれるかと心配しながら見守る社員の姿が目に浮かぶ。ここで思い起こされる状況というのは，世界に関する一般的知識をベースにした推論に基づき想起されるものであると考える。（14）の主文が（13）と同じ「社長は練習通りに演説した」というコトガラであるにもかかわらず許容度が下がるのは，「桜の花が舞い散る中」という明るく華やか状況と，「社長が練習通りに演説した」という訳ありの演説を思わせるコトガラとの間に自然な関連性が想起しにくいためである。その点（15）では「晴れやかな笑顔で演説した」という明るく華やかなコトガラが主文となっており，「桜の花が舞い散る中」という

明るく華やかな状況との間に自然な関連性が想起されやすく，その状況が目に浮かぶようである。次の（17）（18）も同様の理由で「状況のヲ」として成立する。

(17) 春の陽だまりの中を，社長は晴れやかな笑顔で演説した。

(18) 社員がほほ笑む中を，社長は晴れやかな笑顔で演説した。

ふりかえって，（13）は「逆境性」があるから「状況のヲ」として成立しているのではなく，その状況がすぐ目に浮かぶほどに自然な関連性が状況補語と主文の間に存在するため，「状況のヲ」として成立するといえるのではないだろうか。ここでいう自然に想起される関連性とは，世界に関する一般的な知識をベースにした，状況補語と主文との関連性のことである[5]。そして，「状況のヲ」はその関連性が強いほど自然な文となり，関連性が弱いほど不自然な文となる。このような「状況のヲ」の成立に関わる関連性を本稿では「関連性条件[6]」と呼ぶこととする。

「状況のヲ」の使用例を検索すると述語が移動性をもたない動詞の場合には，状況補語と主文が「逆接関係」にあるものが多いのは確かである。しかし，それは「状況のヲ」に限ったことではなく，ある二つのコトガラの関係性を読み込む際には，順接の関係より逆接の関係のほうが際立って見え，関連性の強い関係として認識されやすいというだけのことであり，それが「状況のヲ」の成立条件とまではいえない。このことは，（15）～(18)や次の（19）（20）の実例ように，「逆接関係」になくとも状況補語と主文のコトガラの自然な関連性が想起される場合に「状況のヲ」が成立することからも明らかである。

(19) お腹いっぱいになったところで，君ヶ浜に戻り，陽だまりの中<u>を</u>のんびりお茶しました。

（http://www.ne.jp/asahi/aoki-family/camping/04-cyoshi-2.html 下線は筆者）

(20) これまでの和解記念集会や献花の花束の映像が静かな音楽のもとに映される中<u>を</u>，15 周年記念参加者全員が献花をしました。

（www16.atwiki.jp/pipopipo555jp/pages/3017.html　下線は筆者）

4. 「状況のヲ」の位置づけ

杉本（1993）などの先行研究では，次の（21）のような例を「移動のヲ」，そして（22）や（23）のような例を「移動のヲ」が派生した「状況のヲ」として位置付けている。

(21) 公園<u>を</u>走る。

(22) 豪雨の中<u>を</u>走る。

5　(14) の例に「*」がつけられているが，この例においても「気持ちよく」演説したと読み込めば，自然な関連性が想起されやすくなり，許容度もあがると思われる。この点，査読者からご指摘いただいた。「関連性」があるかどうかというのは，ヲ句が喚起するイメージによるため，そのイメージが狭く限定されていれば，許容度も下がるというように，受け手により文全体の許容度が変動する余地がある。

6　三原（1994）は，「先生は[学生が帰ろうとする]のを呼び止めた」のような主要部内在型関係節について，「内在節事態は何らかの意味において，主節で描写されている事態と語用論的・意味論的に関連していなければならない」といい，その関係のことを，「関連性条件」と呼んでいるが，本稿でいう「関連性条件」はそれとは異なり，状況補語と主文のコトガラの自然に想定される関連性という意味で用いる。

(23) 豪雨の中を戦う。

（21）と（22）は，「走る」という「移動性」のある述語動詞が共通しており，（22）と（23）は「豪雨の中」という状況を表す状況補語が共通しているため，確かに「移動のヲ」と「状況のヲ」は連続しているかのように見える。しかし，（21）と（23）を比較してみれば，（23）の述語動詞に「移動性」はなく，ヲを伴う部分も（21）は場所を表す名詞，（23）は状況を表す句であり共通性がない。加藤（2006）では，状況補語は物理的な空間ではなく背景状況を付加的に述べるものであり，動詞の項になるような名詞句ではないとし，（21）と（22）（23）の用法を分別している。しかし，その一方で，「状況のヲ」は「状況と場所が認知上は比較的近い関係にあり，『の中』を義務的に付加することで，≪場所性≫を付与した上で状況を示すものであることから，場所を表すヲ格の用法と連続的である」とも述べている。状況補語は，移動補語と異なり，動詞句の項になるような名詞句ではないとしながら，その名詞句を「移動のヲ」と「状況のヲ」が連続する根拠とする説明には疑問が残る。本稿でも，状況補語が動詞句の項になるような名詞句ではないという立場に立つが，そのうえで，「状況のヲ」の位置づけを改めて考えてみたい。

前節において「関連性条件」を満たすことが「状況のヲ」の成立条件であると述べたが，その関連性とは主文の述語動詞とその動詞が要求する名詞（モノ）という≪名詞―動詞≫の関連性ではなく，状況補語が表す状況と，主文全体のコトガラとの関連性，即ち≪状況―コトガラ≫の関連性のことである。

(24) 暖かい陽だまりの中を，猫が気持ちよさそうに眠っている。　（＝２）

（24）であれば，その成立には「陽だまりの中」と「眠っている」という≪名詞―動詞≫の関連性ではなく，「暖かい陽だまりの中」という状況補語と「猫が気持ちよさそうに眠っている」という主文のコトガラとの関連性が重要だということである。その関連性は「空間的な 3 次元の領域（状況）において，そのコトガラが起こる」という関係が前提となっている。「～の中」が付与されることで表されるのは，「場所性」ではなく「ある限られた空間的な領域」であると言えよう。

それでは，「状況のヲ」における状況補語にはどのような特徴があるだろうか。次の例を見られたい。

(25) a. ぽかぽか暖かいコタツの中を猫が気持ちよさそうに眠っている。

b. ?コタツの中を猫が気持ちよさそうに眠っている。

c. ??コタツを猫が気持ちよさそうに眠っている。

（25）の a~c はいずれも状況補語に「コタツ」という「猫が気持ちよさそうに眠っている」こととの関連性が自然に想定される名詞が用いられているが，（25）は a から c へ行くほど許容度が下がる。（25）a は，「コタツ」という名詞の前に「ぽかぽか暖かい」という状況を表す修飾語が用いられ，さらに空間的な領域を限定する「～の中」も用いられることによって，「コタツ」を含むヲ句補語は 1 次元の平面的なモノではなく，3 次元の空間，つまり状況として読み込まれることとなり，（25）a は「状況のヲ」として成立する。（25）b は，「ぽかぽか暖かい」という修飾語が省かれたために許容度が下がるが，「～の中」に

よって空間的な領域が限定されることにより，空間的な状況として読み込むことができ，その状況の中でのコトガラとの関連性が捉えられれば「状況のヲ」として解釈できる。しかし，（25）c に至っては，「ぽかぽか暖かい」という修飾語も，空間的な範囲を限定する「～の中」も省かれ，空間ではなくモノとして解釈されやすくなってしまうため，「状況のヲ」として成立しない。このことからも「状況のヲ」は≪名詞－動詞≫という動詞とその動詞が要求する名詞（モノ）という関係ではなく，≪状況－コトガラ≫という状況補語の空間的な状況とその範囲内で起こる主文のコトガラという関係で成り立っていることがうかがえる。

このことは，純粋な移動動詞であると言われる「歩く」においても同様である。

（26）a. 小鳥のさえずりが聞こえる森の中を音を立てないように歩いた。

b. ?森の中を音をたてないように歩いた。

c.??森を音をたてないように歩いた。

（26）も（25）と同じく b では「小鳥のさえずりが聞こえる」という修飾語が，c では範囲を限定する「～の中」が省かれ，a から c へとうつるに従い「状況」と解釈されうる要素が欠けていく。そしてそれにつれ，状況とコトガラとの関連性がみえにくくなり許容度が下がっていく。これはつまり「歩く」という移動動詞であっても，状況と主文のコトガラの間に≪状況－コトガラ≫という関連性が読み込めなければ，その文は「状況のヲ」として成立しないということだと言える。次の例も「歩く」が主文の述語動詞となっているが，a~c の許容度は（26）と異なるようである。

(27) a. 小鳥のさえずりが聞こえる森の中を歩く。

b. 森の中を歩く。

c. 森を歩く。

しかし，本稿では（27）のヲも「状況のヲ」の一種であるという見解に立つ。（27）においても（25）（26）と同様，a~c へとうつるにつれ「状況」と解釈されうる要素が欠けているが，（27）は（25）（26）とは異なり，a~c の間の許容度にさほど変化がない。（25）（26）において許容度が下がるのは，状況補語と主文との間に≪状況－コトガラ≫という関連性がみえにくくなったためであった。（25）（26）で，状況とコトガラの関連性を担保するのは，「世界についての一般的知識」であるのに対し，（27）で状況とコトガラの関連性を担保するのは，動詞の語彙的意味である。「歩く」という動詞は「足を交互に出して進む」という意味であるが，「進む」というのは何らかの 2 次元的空間の中で行われる性質の動きである（それが行われるのが一般に「経路」といわれる空間である）。「歩く」という動作が行われる「森」という状況は，「歩く」という語彙的意味に必然的に含まれる「空間（即ち経路）」に他ならない。即ち，3 次元的空間である「状況」の中で 2 次元的に特化した空間が「経路」ということなのであり，「状況のヲ」の特別な下位類として「移動のヲ」があるという関係になる。ただし，（27）のヲも，いわゆる格項目を示すヲではないことに留意し

なければならない[7]。格項目とは，動詞との固有の意味関係で結びつく名詞項目であるのに対し，（27）のヲは，動詞との意味関係で結びついているのではなく，あくまで，動詞の意味とは独立に存立する「状況成分」を示すのである。加えて，格項目はあくまで「モノ」であるのに対し，「森」はモノではなく 3 次元的な「状況」なのである。

つまり，「ケーキを食べる」という文は≪名詞－動詞≫という結びつきであるが，「森を歩く」は≪名詞－動詞≫という結びつきとは言い難く，むしろ≪状況－コトガラ≫という結びつきだと考えるほうが自然だと思われる。（27）c が「状況のヲ」として成り立つ理由は,「森－歩く」が「移動のヲ」として≪名詞－動詞≫という結びつきであるためではなく，≪状況－コトガラ≫という関連性条件を満たしているためであると言える。「状況のヲ」として成り立つ（27）c の「森－歩く」というコトガラは自然に想定されやすい関連性を持っていると言えるが，（26）c の「森－音をたてないように歩く」というのは，「森」という状況と「音をたてないように歩く」コトが自然に想定できるような関連性を持っているとは言えず，≪状況－コトガラ≫の関連性条件を満たしているとは言えない。これはつまり「歩く」という移動動詞であっても，ヲ格補語と主文のコトガラの間に≪状況－コトガラ≫という関連性が読み込めなければその文は成立しないということである。（27）c は，形式上は≪名詞－動詞≫であるが，意味上は≪状況－コトガラ≫という関係を持つ用法といえ，「状況のヲ」の中の一つの用法に位置づけられよう。

このように考えれば，先にあげた（21）～（23）の関係も，（21）は「移動のヲ」，（22）と（23）は「状況のヲ」として連続する関係にあるわけではなく，（21）～（23）は「状況のヲ」として一括して扱うことができる関係であると言える。

(28) 公園を走る。（＝21）

(29) 豪雨の中を走る。（＝22）

(30) 豪雨の中を戦う。（＝23）

しかし，ここで留意しなければならないのは，述語に移動動詞を持つ文すべてが「状況のヲ」として一括して扱うことができるわけではないということである。杉本（1993）が，「状況補語は，どのような移動動詞と共起しても『経路的』である」と述べているように，「状況のヲ」の主文の述語が「起点」「経由点」「経路」のどれであろうと，状況補語は移動を含む動作が行われる場所（経路）を表す。

(31) 穏やかな春の日の中を公園を散歩した。　（経路）（杉本 1993(25)下線は筆者）

(32) 観衆の声援の中を折り返し地点を通過した。（経由点）（杉本 1993(26)下線は筆者）

(33) 人込みの中を店を出た。　（起点）（杉本 1993(27)下線は筆者）

7　状況のヲと経路のヲには，受動文の主語になり得るかどうかという統語的な差異があるが，「経路」用法においても，「?熊野旧街道は歩かれた」のように全ての用法が受動文となるわけではなく，「熊野旧街道は，最近のアウトドア・ブームで，ハイカーたちによく歩かれているようだ（三原 2000）」のようにある属性を読み込んだような特別な場合に限られるため，受動文になりえるかどうかという点をそのまま状況のヲか経路のヲかの区別に用いることはできないと考え，本稿ではそれらとは独立に論を進めるという方針に立つ。

一般的に「移動のヲ」は，「起点」と「経路」の用法に二分されることが多いが，「状況のヲ」は，そのうちの「経路」用法と共通しているということになる。この「経路」と呼ばれる用法もさらに分類されうる。杉本（1986）のように，移動に関わる場所の範囲が，「点的」なものか，「空間的」なものかで分類するものや，姚（2007）のように，「起点と終点の境界線が明確な場所」か，「広がりのある空間・場所」かで分類するものもある。加藤（2006）では，「経路」を「移動の際に通る予定の線上の場所」と定義したうえで，経路上に存在する通過点【通過点】，始点と終点が明確な線分的な経路【移動域】，始点と終点といった境界が明確でない経路【移動経路】，通り道を移動するように線的に移動するわけではないが移動行為を行う領域【移動領域】の四つに分類している。以下の例はいずれも加藤（2006）からの例である。

(34) のぞみ号が新横浜駅を通過する。　【通過点】

(35) 永代橋を渡る。　【通過域】

(36) 国道を走る。　【移動経路】

(37) 中国を旅行しました。　【移動領域】

しかし，「状況のヲ」が「移動のヲ」や「対象のヲ」とどのような関係にあるかを検討するためには，「経路」と呼ばれる用法を，点か線かということよりも，境界線が明確か否かでカテゴリーを別にして考えることが重要であると思われる。本稿では，「経路」と呼ばれる用法のうち，（34）（35）のような始点と終点の境界性が明確であるものを「有境界性経路」，（36）（37）のような境界性が問題とならないものを「無境界性経路」と区分し，「状況のヲ」「移動のヲ」「対象のヲ」の三類のヲの検討を進める。

5. 「状況のヲ」「移動のヲ」「対象のヲ」の関係

「対象のヲ」は，動作や感情が及ぶ対象（客体）を表すが，「移動のヲ」はどうだろうか。加藤（2006）で「通過点は，有境界性を持ち，点として存在するので，他の用法に比べ客体化しやすい」と述べられているように，「移動のヲ」のうち，境界性のあるものは「対象のヲ」に近いと言える。

(38) 第 3 ゲートを突破する。　（加藤 2006）

その例として，加藤（2006）は（38）の例をあげ，「『突破する』が『通る』と『破る』の 2 つの意味を含むとするならば，前者の意味では経路上の通過点を通るという移動行為であるが，後者の意味では対象物に作用を及ぼすという点で被動性があり，他動詞の対象をマークするヲ（対象格）とみることもできる」と述べている。客体化しやすいのは「通過点」だけではなく，有境界性があれば「通過域」であっても次のように他動的な作用の対象となりうる。

(39) 封鎖されていたレインボー・ブリッジを突破した。　（加藤 2006(106)）

この事実は，加藤（2006）であげられている「突破する」のようないわゆる「対象」と「移動」の 2 つの意味を含意するものに限らず，「有境界性経路」を示す動詞であれば，対象物に作用を及ぼすという点で被動性が読み取れる。

(40) 橋を渡る。

(41) 峠を越える。

（40）では，橋を渡り終えて初めてその行為が成立し，（41）も峠を越えなければその行為が成立しない。「移動動詞」と言われるもののうち，「通過する」「渡る」「超える」のような限界動詞が述語に用いられた場合に，「有境界性経路」となる。小池・田邉（2004）において，他動詞で表される動作は対象を支配しようと意図するものであるが，ヲ格補語をとる他動詞の中には，「本を読んだ」のように，作用の開始前と作用後において対象に変化が起こらず，動作主の対象に対する何らかの関わりが変化したと考えられるものもあると述べられている。この「本を読んだ」は，情報として「処理した」，あるいは内容を「理解した」という意味で「（読んでいない）本→（読んだ）本」という変化を加える動作だと説明されている。本稿のいう「有境界性経路」を示す動詞も「本を読んだ」と同様，対象物「橋」「峠」が「渡る」「超える」という動作によって変化するわけではないが，「渡る」「超える」という動作を完了することによって，「橋」「峠」を「処理した」と捉えられ，対象物が「（渡っていない）橋→（渡った）橋」へ変化したと解釈できる。また，「有境界性経路」はヲ格補語が欠ければ不完全な文となるため，ヲ句を必須補語として要求する点も「対象のヲ」と共通している。このことから，「有境界性経路」のヲ句と述語動詞の関係は「対象のヲ」と同様，≪名詞―動詞≫という関係において成立していると言える。

一方，「無境界性経路」においては，「歩く」「飛ぶ」「旅行する」のような非限界動詞[8]となる動詞が述語となる。そのため，ヲが表す場所は，境界線が明確にあるわけではなく，その動作が行われる空間の範囲を表すものなので，述語動詞の動作がその対象物（場所）に対して作用を及ぼす，つまり，対象物に対して「処理した」と解釈することは難しい。

(42) 公園を歩く。

(43) 空を飛ぶ。

また，「無境界性経路」においては，ヲ格補語がなくとも成立するため，主文の述語動詞にとって必須補語であるとも言えない。寺村（1982）においても，述語動詞が「走る，歩く，飛ぶ，はう，進む」などの場合は，ヲが必ずしも必須というわけではないことが以下の例とともに説明されている。

(44) 園児タチガ歩イテイル　（寺村 1982(87)）

(45) 彼ハ毎日歩イテ学校ヘ行ク　（寺村 1982(88)）

(46) 駅マデ歩イテ 10 分デス　（寺村 1982(89)）

(47) 走レ　（寺村 1982(90)）

寺村（1982）では，「歩く」という動詞が，単に線上の運動とその移動の場所ということより，（自分の）足を交互に地面につけて前に進む体の動きそのものを，つまり「走る」「跳ぶ」などとの対立で，言うことが重要であるときは，「歩く」は，（走る，跳ぶも同様に）

8　「非限界動詞」が成立するのは，アスペクトの限定により強制されない場合に限られる。「限界動詞」「非限界動詞」については三原（2002）を大いに参考にした上で，加えて査読者からご教示いただいた。

通過点を示す補語がなくても一向に不完全な叙述という感じはしないと述べられている。つまり，「歩く」のような動詞が用いられた場合は，動詞の意味から対格を要求するわけではなく，前述したように，その主文のコトガラと関連する状況を表すためにヲが用いられていると考えられる。

次に，「支配性」を「対象のヲ」と「移動のヲ」の共通性としてあげている姚（2007）の例を見てみたい。

(48) 私はその赤をもっとよく見るため（だったと思う）丘を登って行った。
（大野昇平「野火」＝姚 2007(30)）

姚（2007）は，「移動が『丘』全体に及ぶことによって，『丘』が動作主の直接的な征服，すなわち支配対象とみなされうる」と述べ，「このような『支配意識』は典型的他動詞構文における対象への物理的支配力に影響しており，統語的には他動詞構文と同様，直接支配の及ぶことを示すマーカーとしてのヲ格の使用が要求される」と加えている。移動が全体に及ぶとは，「移動のヲ」のうち「有境界性経路」の場合であり，ここからも「有境界性経路」と「対象のヲ」との共通性がみてとれる。しかし，姚（2007）では，「有境界性経路」だけではなく「無境界性経路」といえる次の例においても「全体性」を読み取ろうとしている。

(49) 運動の為に，湯の中を泳ぐのは中々愉快だ。おれは十五畳の湯壺を泳ぎ巡って喜んでいた。（夏目漱石「坊っちゃん」＝姚 2007(18)）

(50) 大きな札へ黒々と湯の中で泳ぐべからずとかいて…。（同上＝姚 2007(19)）

姚（2007）は，ヲとデを比較し，ヲを用いた（49）は「湯の中」を全面的に泳ぎ切って，湯壺の一方の端から向うの端まで，またはその反対の方向へ泳いでいく姿が目に浮かぶものであり，ヲは全体的移動を示すが，デを用いた（50）は「湯の中」という特定の場所の範囲の中で泳ぐという動作をしているという程度のことであり，必ずしも端から端まで全体的に移動していくことが読み取れないと述べている。しかし，次の（51）のように，「端のほうだけ」と一部の使用であることを加えても文は成立することから，(49)の例において移動が「全体的」である必要はなく，端から端まで全面的に泳ぎ切ると読み取れなくともヲは許容されるといえる。

(51) 運動の為に，湯の中を泳ぐのは中々愉快だ。ただ，人の迷惑にならないよう，端のほうだけで泳いでいた。

つまり，「無境界性経路」の場合は，「端から端」や「全体的」な移動である必要はなく，恣意的に設定された範囲内[9]で，ある移動をともなう動作が行われたことを表すと考えられる。そのため，（49）のような「無境界性経路」が用いられた用法は，「状況のヲ」のうち，述語動詞が移動を表す一つのバリエーションと考えるべきで，「対象のヲ」との共通性を無理に探す必要はないのである。

これまで検討してきたように，天野（2007）では「状況のヲ」における「逆境性」が，

9　「恣意的に設定された範囲」という表現は，査読者からのご教示による。

また姚（2007）では，「移動のヲ」における「支配性」がガヲ文に一般にみられる対象性との共通点としてあげられているが，「状況のヲ」において「逆境性」が成立の必須条件ではないことや「無境界性経路」において「支配性」が必ずしも存在するわけではないことから，「対象性」という点で「対象のヲ」「移動のヲ」「状況のヲ」の三類を結ぼうとすることは困難であると言える。また，杉本（1986）や加藤（2006），天野（2007）では，「状況のヲ」が「対象のヲ」や「移動のヲ」とは異なる点があることを示しながらも，それと同時に三類が連続的であると述べているが，これまでのそれぞれの共通性から考えると，三類が連続的な関係であると考えるよりも，「対象のヲ」のバリエーションとして「有境界性経路」が存在し，そして「状況のヲ」のバリエーションとして「無境界性経路」が存在すると考えるほうが自然であると言えよう。

「有境界性経路」を含む「対象のヲ」は，動詞が要求する対格として存在することから，≪名詞―動詞≫という格関係にあると言えるが，「無境界性経路」を含む「状況のヲ」は，形式上は「対象のヲ」と同じ≪名詞―動詞≫であるが，ヲは動詞が要求する格ではなく，ヲ格補語と主文のコトガラの間に≪状況―コトガラ≫という関係を持つ用法といえ，もはや格関係にあると言うことはできない。

6. まとめ

本稿では，「状況のヲ」の用法について，これまで「移動性」や「逆境性」から説明されていた成立条件を再検討し，それらが「状況のヲ」の成立条件ではなく，「状況のヲ」の成立には状況補語と主文が≪状況－コトガラ≫という関連性条件を満たしていることが必須条件となることを詳しく説いた。さらに，「移動のヲ」の「経路」用法についても考察し，境界性の有無により「有境界性経路」と「無境界性経路」に分類した。そこから，「対象のヲ」「移動のヲ」「状況のヲ」はそれぞれ連続するものではなく，「有境界性経路」は「対象のヲ」の一種であり，「無境界性経路」は「状況のヲ」の一種であることを示し，前者は格助詞，後者は状況成分であると論じた。

参考文献

天野みどり，2007，「状況を表すヲ句について」，『和光大学表現学部紀要』8，和光大学表現学部，pp.1-13

池上嘉彦，1993，「〈移動〉のスキーマと〈行為〉のスキーマ―日本語の「ヲ格＋移動動詞」構造の類型論的考察―」，『外国語科研究紀要』41-3，東京大学教養学部外国語科　pp.34-53

宇都宮裕章，1997，「ヲ格の境界性－「範囲」を定める格としての認定－」，『静岡大学教育学部研究報告（人文・社会科学篇）』48，静岡大学，pp.17-32

加藤重広，2006，「対象格と場所格の連続性―格助詞試論（２）―」，『北大文学研究科紀要』118，北海道大学，pp. 135-182

小池清治・田邉知成，2004，「格助詞ヲ・ニの表すもの―「ヲ格型構文」に見られるヲ→ニ原則―」，『宇都宮大学国際学部研究論集』18，宇都宮大学，pp.99-120

菅井三実，1998,「対格のスキーマ的分析とネットワーク化」,『名古屋大学文学部研究論集（文学）』44（130），名古屋大学，pp.15-29

菅井三実，1999,「日本語における空間の対格標示について」,『名古屋大学文学部研究論集（文学）』45（133），名古屋大学，pp.75-91

杉本武，1986，「第 3 章　格助詞―「が」「を」「に」と文法関係―」，奥津敬一郎・沼田善子・杉本武『いわゆる日本語助詞の研究』，凡人社，pp.281-318

杉本武，1993,「状況の「を」について」,『九州工業大学情報工学部紀要（人文・社会科学編）』6，九州工業大学，pp.25-37

寺村秀夫，1982，『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』，くろしお出版

成田徹男，1979，「動詞の意味と格―「移動」に関する動詞を中心に―」，『人文学報』132，　東京都立大学，pp.47-64

三原健一，1994,『日本語の統語構造　生成文法理論とその応用』，松柏社

三原健一，2000,「日本語心理動詞の適切な扱いに向けて」『日本語科学』8，国書刊行会 pp.54-75

三原健一, 2002,「動詞類型とアスペクト限定」『日本語文法』2-1, 日本語文法学会, pp.132-152

三宅知宏，1995,「ヲとカラ―起点の格標示―」，宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義語表現の文法（上）』，くろしお出版，pp.67-73

三宅知宏，1996,「日本語の移動動詞の対象標示について」,『言語研究』110，日本言語学会，pp.143-168

森山新，2003,「認知言語学観点から見た格助詞ヲの意味構造」,『台湾日本語文学報』18 台湾日本語文学会，pp.1-8

森山新，2008,『認知言語学から見た日本語格助詞の意味構造と習得-日本語教育に活かすために-』，ひつじ書房

姚艶玲，2007,「日本語のヲ格名詞句を伴う自動詞構文の成立条件―認知言語学的観点からのアプローチ―」,『日本語文法』7-1，日本語文法学会，pp.3-19

(2011. 12. 19 受理)